

チャイルド・ファンド・ジャパンだより

[スマイルズ] 2018年2月NO.43

SMILES

<https://www.childfund.or.jp>



かまどに息を吹きかけ、
火加減を調整(ロジェリン)

特集

学校に
通うために必要な、
目に見えない支援

井戸水を使って、
洗濯のお手伝い(ロウェナ)

ChildFund
Japan

チャイルド・ファンド・ジャパンは、1975年より、
アジアを中心に貧困の中で暮らす子どもの健やかな成長、
家族と地域の自立を目指した活動をしています。

特集

学校に通うために必要な、目に見えない支援



フィリピンでは今でも小学校を卒業できずに中退してしまう子どもたちが多くいます。学校に通わなくなる原因は一つではなく、子ども一人ひとりにそれぞれの理由があります。子どもたちが直面する問題をていねいに見て、その背景にあった支援を行う必要があります。今回の特集では、小学校1年生の時に留年してしまったロジェリンのストーリーと、飲酒癖のある父親と暮らしているロウエナのストーリーをご紹介します。

1年生で留年したロジェリン

ロジェリンは控えめで物静かな小学6年生の女の子です。しかし少し話せば、芯のとおった、しっかりとした女の子だということが分かります。9人きょうだいの6番目ですが、年上のきょうだいは結婚して家を出ており、すぐ上の兄は病気で寝たきりの生活となっているため、きょうだいの中でいちばん多くの手伝いを担っています。自宅の一角で営むサリサリストア(小さな食料雑貨店)の店番から、妹や弟の世話、毎回の食

事の炊飯まで、毎日てきぱきとたくさん家事をこなします。

ロジェリンが在籍する協力センター35があるカピテ州は首都マニラから近く、急激な都市化と人口増加が起きている地域です。また、政府がマニラのスラムから住民を移転させている再定移住地区も多く、家屋が密集した街並みにはスラムの面影が残ります。その再定移住地区の中でひときわ狭い路地と川に挟まれるようにして建っている、コンクリートブロックと木材、

慣れた手つきでお米を研ぎます



トタンを組み合わせで作られた小さな家にロジェリンと家族は暮らしています。家庭が貧しい生活を強いられていたため、4年生の時ロジェリンはスポンサーシップ・プログラムの支援を受けるチャイルドとなりました。

1年生の時にロジェリンは大きな病気にかかったことがあります。1週間ほど寝込んでしまい、学校を休まなくてははいけませんでした。病気から回復したあとすぐに学校に戻れば、1週間分の授業の遅れを取り戻すことは簡単だったかもしれません。しかしロジェリンは授業についていけなくなったことに気がおくれしてしまい、どうしても学校に行くことができませんでした。授業の遅れはさらに大きくなり、ますます学校に行きづらくなるという悪循環

となり、ロジェリンはそのまま1年間学校を休んでしまいました。結局ロジェリンは、留年というかたちで1年遅れて学校に通うことになりました。

センター35のように急激に人口が増えた地域では、その収容能力を超えた数の生徒が一つの学校に通っていることがあります。ロジェリンが通う学校も、教室に生徒全員が入りきらず、午前と午後の二部制を採用していました。生徒の数が多いと、学校の先生がすべての子どもたちをきちんと気にかけて、ていねいに見守ることが難しい場合もあります。特に、ロジェリンのようなおとなしい子どもは見過ごされがちになってしまいます。

自宅で昼食を済ませたあと、妹と一緒に登校します

学校でも責任感が強く、まじめな生徒だと先生から評価されています



学校に通うために、内面的な成長を支える

協力センターのスタッフたちも、ロジェリンの内面的な性格の背景には留年という引け目があることに気付いていました。クラスの他の子どもたちよりも1歳年上であるという「居心地の悪さ」が、学年があがり、思春期になるにつれて強くなるであろうことも気がかりでした。同じクラスの子どもたちとうまく付き合うことができないと、学校で居場所を失ってしまうことにつながります。

センターのスタッフたちは、6年生のチャイルドたちを対象にして実施する「子どもキャンプ」が、ロジェリンが大きく成長するきっかけになるのではないかと期待していました。子どもキャンプは協力センターが主催する1泊2日のイベントで、年間でもっとも規模が大きな活動の一つです。チャイルドたちはディスカッションやチームでのゲームなどの活動を通じて、友だちとの関わり方や、考えの違う人との付き合い方、さらには、自分の内面的な問題への対処法を学びます。

キャンプ当日、スタッフは心配を胸にロジェリンの姿を探しました。そこでスタッフの目に入ってきたのは、ほかのチャイルドたちと一緒に思いきり楽しんでいるロジェリンの明るい笑顔でした。キャンプでのロジェリンは、どの活動にも積極的に参加し、真剣に取り組んでいました。

チームワークを高めるためのセッションでは、チームのために体と頭を使う難しいゲームを一生けんめいがんばり、疲れと同時に達成感を味わいました。自己啓発のセッションでは自分の性格について考え、また、グループの仲間たちから自分の長所を教えてもらうことで、自分自身への理解を深めました。それから、離れた地域に住む新しい友だちができ、寝る前にはテントの中でおしゃべりに花を咲かせました。



チームワークを高めるセッションでは、グループのみんなで一丸となってがんばりました

「キャンプでは全然緊張しませんでした。どのゲームもセッションもすごく楽しかったです!グループのみんなから、やさしい、がんばり屋、かわいいと言ってもらえてとても嬉しかったです」。キャンプのあとロジェリンがスタッフに話したことです。新たな環境で初めてのことに挑戦して、自分に自信をつけたのがはっきりとわかりました。チャイルドたちのなかに溶け込み、自分らしく振る舞っているロジェリンの姿にスタッフは安心しました。

学校と家だけだったロジェリンの世界は、このキャンプによって大きく広がりました。家族から離れて過ごした2日間、そこで得た新しい友だち、色々なことへ挑戦した経験は、ただの「楽しい思い出」としてではなく、自分を支える自信となり、これからの人生で直面する困難を乗り越える力となるでしょう。



同じグループのメンバーとは、すっかり打ち解けて仲良くなりました(左上、水色のシャツの女の子がロジェリン)

父親の意識が変わったロウェナ

家庭訪問によって見えてきたこと

協力センター27のあるルソン島北部のイサベラ州に暮らすロウェナは、小学5年生の時にスポンサーシップ・プログラムの支援を受けるチャイルドになりました。父親のロメオは、0.5ヘクタールの土地で米を育てる農家として働いていました。母親も農業を手伝い、農作の仕事がない時期は洗濯屋で働いていました。両親ともが働いていたにもかかわらず家族は貧しい生活を強いられており、一家は地主の許可を得て農地の片隅に建てた、ニッパヤシの家に暮らしていました。

チャイルドになったばかりの頃、ロウェナは恥ずかしがりやの女の子でした。センター活動に参加している間も、発言することは滅多にありませんでした。学校の先生の話では、学校でも内気で大人しくしているということでした。また、筆記試験の結果からきちんと授業の内容を理解していることが確認できるものの、宿題を提出しないことが多く、学校も欠席がちのため成績はよくない、ということも伝えられました。



田んぼでタニシを拾っているところ

協力センターのスタッフは、自信をつけてもらうための自己啓発プログラムに参加するよう、ロウェナに促しました。ロウェナは自己啓発プログラムやレクリエーションに参加するようになったのですが、恥ずかしがりやで無口であることは変わりありませんでした。センターのスタッフは、いずれは自信を持って心を開くようになるだろうと思いながらも、それには長い時間がかかるだろうと感じていました。

家庭訪問を繰り返すうちに、スタッフは親戚や近所の人々から父親のロメオについての良くない噂を耳にするようになりました。ロメオはお酒をたくさん飲むことで近所の人々に知られていました。農業で得た収入の多くをお酒やタバコに費やしており、もともと厳しい家計を悪化させていました。給料が入ってもツケで買っていたお酒の支払いに回され、家庭には少ししか渡されないこともありました。ロウェナが学校を休みがちだった理由も徐々に明らかになりました。家計を支えるために近所の田んぼで食用となるタニシを拾い、市場で売っていたのです。



ロメオの飲酒癖から生じる問題は金銭的なものだけではありませんでした。彼は泥酔して帰宅すると乱暴にふるまい、家族に暴言を吐きました。身体的な暴力はなかったようですが、母親と子どもたちは全員酔っぱらった父親を恐れていました。ロウェナは、夜中に近所に聞こえる大声で話す父親を、怖がり、避けていました。

ロメオがお酒やタバコを買っていた街のお店

親が変われば子どもも変わる

フィリピンでのスポンサーシップ・プログラムでは、チャイルドだけでなく、チャイルドの家族を対象としたセミナーや研修も実施しています。職業訓練などの実践的なものだけでなく、「子どもの育て方」についてなど、家族の内面の成熟や意識の変化を目指したものもあります。その中から「系統的で効果的な子育て」と、「子どもの権利」についての2つのセミナーに参加するよう、センタースタッフはロウェナの両親を誘いました。2人はそろって参加し、暴力や暴言を使わずに子どもの権利を尊重して育てる「ポジティブ・ディシプリン」の実践法や、家族にとって大切なことの意味決定には子どもの意見も取り入れることの重要性を学びました。



ロウェナの一家は2016年の台風21号、22号で被害を受け、チャイルド・ファンド・ジャパンの緊急・復興支援として食料を受け取りました。真ん中の男性がロメオ



大雨によって崩れてしまった田んぼの土手を直す作業をしているロメオ

効果はてきめんでした！センタースタッフが期待していたよりも大きく、ロメオは変わりました。まず、セミナーに出てすぐに、お酒を飲む量を減らしました。たまに酔っぱらって家に帰ることがあっても、以前のように乱暴にふるまうことがなくなりました。お酒やタバコへの出費を減らすことで家計への悪影響は軽減されました。さらにロメオはセンターから支給された種で家庭菜園を始めたり、家畜を育てたりして、家庭の生活を改善するための取り組みを始めました。ロメオの変わり様に、親戚や近所の人々だけでなく、センタースタッフもとても驚きました。もしかしたらロメオ自身にも変わりたいという意味はもともとあって、必要としていたのはちょっとしたきっかけだったのかもしれませんが。

家計が安定したおかげで、ロウェナは収入を得るために学校を休んでタニシを拾う必要はなくなりました。学校に出席し、宿題も提出するようになったことでロウェナの成績は改善しました。しかし、ロウェナにとってもっとも大切だったのは、父親に愛されていると気付いたことでした。父親ときちんと話すようになり、父親を恥ずかしいと思うこともなくなりました。自分に自信を持つようになったロウェナはよく笑うようになりました。

その日、ロウェナは朝から緊張していました。「問題解決ゲーム」というセンター活動でリーダーを務めることになっていたからです。以前のロウェナだったら、リーダーをやるなんてもってのほか、活動に参加しても自ら話すことはほとんどありませんでした。しかしその日のロウェナは、発言をためらっている子どもたちにも率先して声をかけ、みんなをまとめて計画通りにゲームを進行し、立派にリーダーを務めあげました。「今日は私にとって記念の日になりました！」と、達成感あふれる笑顔でロウェナはセンタースタッフに話しかけました。「不安だったけど、私にもリーダーができました。問題は解決することができるんだと、改めて学ぶことができました」。



センター活動で、他のチャイルドたちと

追悼、 大谷リツ子先生

対等、参加、自立を目指した支援

チャイルド・フアンド・ジャパンの前身である基督教児童福祉会(CCWA)国際精神里親運動部は、1975年4月に活動を始めました。その草創期に手弁当で事務局の運営を担った5名のうちの1人、大谷リツ子先生が2017年9月20日に逝去されました。夫であり運動部部長であった大谷嘉朗先生とともに、リツ子先生は広報担当として、団体の基盤を築く役割を担いました。まだ国際協力という言葉さえ語られなかった時代に、アジアの子どもたちを支援するという決意を持ってこの運動を始めた力はどこから生まれたのでしょうか。また、その運動が目指したものは何だったのでしょうか。

(事務局次長 松浦宏二)



リツ子先生と嘉朗先生、1990年ころ。
嘉朗先生は2013年に逝去されました。

私があなたがたを愛したように、 あなたがたも 互いに愛し合いなさい

大谷リツ子先生が亡くなる1ヵ月前、久しぶりにご自宅を訪問する機会がありました。思い出ばなしで話が弾むなかで、次のように話してくださったことを印象深く覚えています。「アメリカやカナダの決して豊かではない人たちが基督教児童基金(CCF)を通して戦後の日本の子どもたちのために支援を行ってくれたことに対して、私たちはいただいた愛をバトンタッチしなければいけないと思っていました。また、学徒出陣の経験のある夫の大谷嘉朗には、アジアの人びとへの贖罪を果たさなければという気持ちが強くありました」。

CCFから日本の戦災孤児に寄せられた支援は、26年間で56億円にのぼり、86,000人の子どもたちがその恩恵を受けました。戦後の荒廃の中でわずかな予算で戦災孤児たちを支えなければならない状況に直面していた日本の福祉関係者にとって、この支援がどのような意味をもつものであったか、福島県で児童養護施設「堀川愛生園」をつくられた谷昌恒先生は次のように回顧されています。「大都市はほとんど壊滅し、一面の焦土と化した焼け跡に赤く錆び果てた焼トタンが散乱していました。社会福祉一筋に生きてきた私たち福祉関係者は、みなその焼け跡に立ち尽くし、悲哀を深く胸にきざみこんだのです。堀川愛生園は子どもを養っていると言いながら、大人も子どもも餓えて死ぬばかりでした。40人の定員の愛生園で30人の子どもがCCFによる支援の対象となりました」。

戦後の最も困難な時期に世界の人々から日本の子どもたちに示された愛の行為を、日本人としてアジアの子どもたちのために受け継いでいかなければならない。基督教児童福祉会の人々が、その思いを形に表すことを選び取るなかから生まれたものが、国際精神里親運動でした。「愛のバトンタッチ」、「アジアの人々への贖罪」という言葉の背後には、そうした歴史を経て生まれてきた「深い祈りと熱い思い」がありました。

施しなら受け取りませんよ

事業を創りあげるうえで協力してくれたフィリピンのカトリック修道会のシスターたちが大谷先生たちに伝えたのは、「施しなら受け取りませんよ」という言葉でした。これこそ、国際精神里親運動の指針となった言葉です。大谷先生たちは次のような原則を明確にしました。「援助する側とされる側に上下関係があってはいけない」、「サービスを受ける人たちがそのプログラムに参加し、私たちの援助をどのように活用するのかということを決定してもらう。その結果として自立を支える」、「依存を高めるものなら、その援助はしない方が良い」。こうした理念が、大谷先生たちの頭には常にあったといいます。

参加、自立、オーナーシップという言葉が日本の開発専門家の間で語られるようになるのは、1980年代半ば以降のことです。それより10年も早く、大谷先生たちは対等な支援を模索するなかで、こうした考え方を実践しようと動き

始めていました。支援を受ける側であったフィリピンの人々からの誇りに満ちた言葉は、社会福祉の専門家であった大谷夫妻の心を揺さぶり、時代に先駆けた海外協力の取り組みの契機を与えてくれたのです。



支援を受けていた日本の子どもたち

和解と平和を創る人

こうしたCCWAの取り組みは、フィリピンでは次のように評価されました。「1977年に大谷嘉朗氏と初めて出会ったころ、彼の意図、CCWAの意図は大変明確でした。彼はCCWAとともに、和解と平和のために、苦難の中にいる人々の苦しみをやわらげ、日本人とフィリピン人の両方の人々に癒しをもたらすために、ここフィリピンにおりました。この同じ生き方が、彼をまだ知らない、また会ったことのない人々に受け継がれていくように祈ります」。(イロイロ市、シスター・エマニエル)

CCWA国際精神里親運動部がチャイルド・ファンド・ジャパンとなった2005年、大谷リツ子先生はこう振り返っています。「1975年にこの運動を始めた時、理解してくれる人は非常に少なかったですね。そんなことをやっても無駄だとおっしゃる方々がありました。当時、独裁政権と言われたマルコス政権を資するだけだと批判もされました。でも、目指すものがはっきりしていたから、私たちは批判に耐えられたのです」。

大谷リツ子先生たちが始めた活動は、40年を経た今

では5,000名を超える支援者の方々によって支えられ、続いています。静かな水面に投げられた小さな石から生まれた波紋は、チャイルド・ファンド・ジャパンに引き継がれ、今も大きく広がっています。21世紀の子どもの課題を前にした私たちがどんな思いでどんな行動を選び取っていくのか、戦後の困難な時代に生きる子どもたちの課題に取り組んできた人々が静かに見守っています。



支援開始当時のチャイルドたち

活動報告書と動画が完成しました!

2015年4月25日に地震が発生し、5月1日からチャイルド・ファンド・ジャパンは緊急・復興支援を開始しました。食料、シェルター、子どもの保護、教育、水と衛生など、これまでに取り組んできた活動は多岐にわたります。今後も、復興に向けた活動は継続して行いますが、「緊急・復興支援事業」としては、計画していた事業をすべて終えた2017年9月末を区切りとし、完了いたします。温かいご支援をくださった皆さまに、心よりお礼申し上げます。

この度、2年半の活動を記録した20ページからなる報告書と、6分の動画を制作しました。報告書はインフォグラフィックを使って詳細を分かりやすくご報告しています。動画は地震直後の子どもたちの声から、新しい教室で学ぶ子どもたちの様子までコンパクトにまとめています。どちらもぜひご覧ください!



● 活動報告書 QRコードまたは検索でアクセス!

チャイルド・ファンド ネパール報告書

検索



● 動画 QRコードまたは検索でアクセス!

YouTube

ネパール大地震 緊急・復興支援プロジェクト

検索



インフォメーション コーナー

お願い

余った年賀状がネパールの子どもたちへの支援になります!



ご家庭にある書き損じハガキや年賀状、未使用の切手をどうぞお送りください。いただいたハガキや切手は、ネパールの子供たちが安心して学べる学校環境を整備するために活用されます。52円のハガキ10枚で教室で使うざぶとんを1つ、140枚で低学年の子供たちでも使える座卓を1つ贈ることができます。

<書き損じハガキの送付先>

〒167-0041 東京都杉並区善福寺2-17-5
チャイルド・ファンド・ジャパン ハガキ係

お礼

アンケートへのご協力をありがとうございました

フィリピンのチャイルドの成長の記録をお送りした皆さまに、アンケートのご協力をお願いいたしました。多くの方々からご回答いただき、誠にありがとうございました。まだご返送いただいていない方はどうぞお送りください。集計結果は、同様にご協力いただいたネパールのチャイルドの成長の記録のアンケート結果とあわせて、次号のSMILESでご報告する予定です。

お知らせ

領収証の発送が完了しました

2017年にいただいたご寄付の領収証の発送が完了いたしました。チャイルド・ファンド・ジャパンは、「認定NPO法人」に認定されており、ご支援くださる皆さまには、所得税、法人税、相続税などの税制上の優遇措置を受けていただくことが可能です。特に個人の方がチャイルド・ファンド・ジャパンに寄付をした場合、最大で寄付金額の約40%を所得税から控除できます。一般的に、税額控除方式を選択されると所得税控除方式より大きな減税効果が見込まれます。

詳しくは「寄付金控除について」のページをご覧ください。

<https://www.childfund.or.jp/support/deduct.html>

チャイルド・ファンド・ジャパン 寄付金控除

検索

ChildFund Japan

Vision Mission

チャイルド・ファンド・ジャパンはここに掲げるビジョン(目標)、ミッション(使命)に基づいて活動します。

ビジョン(目標)

すべての子どもに開かれた未来を約束する国際社会の形成

ミッション(使命)

生かし生かされる国際協力を通じて子どもの権利を守る

チャイルド・ファンド・アライアンス

ChildFund Alliance

人種、宗教、性別、国籍を問わず世界の子どもたちに、効果的な支援活動をするためのネットワークで、子どもたちに向けたスポンサーシップ・プログラムを行う11団体から構成されています。チャイルド・ファンド・ジャパンは2005年4月に加盟しました。

スマイルズ

<チャイルド・ファンドだより SMILES> 2018年2月発行

特定非営利活動法人チャイルド・ファンド・ジャパン
〒167-0041 東京都杉並区善福寺2-17-5
理事長/高田和彦 事務局長/武田勝彦
TEL. 03-3399-8123 FAX. 03-3399-0730
E-mail: childfund@childfund.or.jp
URL: <https://www.childfund.or.jp/>

(デザイン)モステデザイン研究所 (印刷) 有限会社東西印刷

